

シリーズ発刊にあたって

本学の解放教育を一步でも推し進めようと模索するなかで、この資料シリーズ発行の運びとなったことを喜ばしく思います。ここのところ毎年、教養・専門・教職の各分野で、部落問題をはじめとして、民族問題論、差別問題論Ⅰ・Ⅱあるいは同和教育論などが開講されて、学生諸君には、差別とはなにか、解放への取り組みはいかにあるべきかなどについて、多面的な学習の機会はいちおう開かれています。ただ肝心なことは、講座をとうしてその課題が人間の尊厳をとりもどす作業として、日常生活の中で十分に自覚されているかどうかであります。

この点から過去、学内に発生した差別文書、発言、落書などの事実をふりかえると、1973年の社会福祉実習指導の文書にはじまり、1975年には倫理学の講座で、1980年には社会科教育研究の授業で差別発言があり、糾弾を受けるに至りました。そののち1981年から85年にかけては差別落書が頻発しています。現在でもこの問題は解決されていません。1986年5月20日に発見され

た落書が如実にこのことを証しています。一見してほとんど判明しがたいボールペンの字で机の上に「ぶっ殺すど、火をつけるど、かたわにすんど」とあります。そこには身体障害者にかかわる差別的な用語と暴力的な表現の中に根深い偏見が隠されています。この落書きは特定の対象を明らかにしていないものの、他のどのような差別にも関連して、その意識を助長するといっても過言であるまい。このような事態につき、今後、本学構成員が相互に連帯して解決して行くべき課題は山積しています。

さてこのシリーズNo.1として、本学講師の八木晃介先生の新入生に対する講演を載せていただけることになり、心から感謝しています。原稿はテープを起し、先生に朱筆を入れてもらったものを使用しました。このシリーズが学生・教職員をとわず、本学の皆さんに読んでもらう資料として、学問の自由と人権意識といった共通のテーマに向ってともに取り組む一助としたいと思います。

1987年4月1日

解放教育研究委員長

小林圓照

講演「学問の態度と人権意識」

八 木 晃 介 講 師

「皆さん、御入学おめでとう」と、一応は申し上げておきます。「一応は」と申しますのは、4年後に（4年後とは限らず、5年、6年かかったり、それ以上のんびりしていられる人もかなりいるが）この大学を卒業される時に、真に良かったと思われる、あるいは卒業した後（僕が大学生であることをやめてもう20年近くになりますが、そのくらい経って）あの4年ないし5年6年の学生生活が無意味ではなかったとか、あるいは非常に積極的な意味があったという観点から振り返ることができてはじめて、この入学が「めでたかった」ということに多分なるだろうと思うからです。

そういう風に、4年後なりあるいは生涯のもっと後半の時期に、積極的なプラスのイメージをもって、ここでの大学生活を振り返ることができるような、そんな学生生活を送っていただきたいものだと思います。

「よかったな」と思うには、さまざまなレベルや種類があるけれども、僕の感覚でいうと、俗にいう「目のウ

ロコが落ちる」という体験を沢山できるかどうか、が問題です。知性やあるいは理性、さらには感性のレベルで目に貼り付いていたウロコが、1枚あるいは2枚も3枚も落ちるとするのは、もう大変な喜びであり、感激であります。そういう“目のウロコが落ちる”という体験を、ここでの大学生活の中で経験（体験）できるかどうかということが、大変な意味をもつのではないかと考えます。

僕自身が大学に入った時に「あゝ目のウロコが落ちた」とその時に、実感したことを1つだけいいます。それは今さら皆さんにいうほどのことではないかもしれない。

「何でそんなことで目のウロコが落ちるのか、そんなことは当たり前じゃないか」と、いわれそうですが、実は、僕は大学に入学するまで、アメリカのリンカーンという大統領は、非常に偉い人物だと思い込んでいました。小学校とか中学校で読む「自伝」、あるいは「評伝」などは、どれをとってもリンカーンは偉人として描いています。つまり、アメリカの大統領として初めて奴隷解放令に署名した大統領だというわけです。確かに、ヒューマニズムの精神からいえば「偉人」といってよいのです。けれどもそれだけのものだという形で、ただただ尊敬の対象

でしかなかったのです。

ところが大学に入って、西洋史の授業の中で（たまたまこの先生が、黒人解放運動史が専門だったので、その問題だけが講義された）原文でリンカーンの演説集を読まされたのです。ずっと読んでいくと、彼は次のようなことをある演説で述べています。「アメリカを統一するために、奴隷解放が必要であれば、私はそうするであろうし、もしアメリカを統一するために奴隷を解放しないでおくことが有利だとすれば、私はそうもするであろう」といっていたんですね。つまり、リンカーンにとって、奴隷解放というのは、第二義的な位置づけしかなされていらない。最大の眼目は南北統一であり、アメリカを文字通り工業国家として資本主義化していくということであって、その目的に照らして黒人奴隷解放が有利か不利か、どちらか有利な方を手段として選択したにすぎなかったのです。

たまたまこの場合は（たまたまというのは語弊がありますが）、奴隷を解放し、黒人を自由な労働力として最大限利用しつつ、南部を自国の工業製品の消費地として利用し尽くす、そのために黒人解放が有利だったのです。

そうしますと、僕が小学生ぐらいの時期から培ってきたリンカーンのイメージというのは、180度とはいわないまでも、相当程度、変化せざるをえないということになるのですね。「非常にチャチで幼稚なことで目のウロコが落ちたものだ」と皆さんは笑うかもしれないけれど、そういう体験が確かに僕にはひとつあります。

いまお話した“目からウロコが落ちた”という体験は、単なる知識レベルで「えっ、実際はそうだったの、知らなかったな」ということで感心したにすぎないのですが、そういう体験は必ずしも知性やあるいは理性のレベルだけではなく、さまざまなレベルでもありうるのだと思います。

僕が初めて部落問題との接触を果たしたのは、丁度皆さんと年齢的に同じかもう1年ぐらいたった頃で、僕が19歳の時でした。1964年だったと思います。僕は、先程ご紹介いただいたように、京都の真ん中で生まれ育ったのです。京都というのは関西各地の中でも、特に非常に因習深い土地柄であり、差別意識も極めて強い地域です。幸いにもわが両親は、僕に対して積極的に差別意識を注入することはありませんでした。もちろん逆に積

極的に反差別意識を注入する（教える）ということもありませんでした。とにかくある意味では、幸か不幸か部落問題そのものに対しては、全く無知で白紙のまま育ち、さきほどのリンカーンの話ではありませんけれども、全然知らないまま大学まで行ってしまったのです。

そして1回生から2回生になる時に初めて、僕の恩師に当たる人に無理に連れ込まれるような形で、被差別部落の社会学的な調査に参加させられました。それが19歳の時でした。現在では法律があり、その法律に従って主とし環境改善事業を中心にいわゆる「同和」行政がある程度まで進み、生活環境（住環境）もかなり改善されてきました。この法律の根拠となった同和対策審議会答申というのが1965年（昭和40）に出たのですが、僕が初めて被差別部落に第一歩を踏み記したのは、その前年でありました。ですから、当時はまだ京都も大阪もあるいは兵庫県も「同和」行政などはほとんど皆無といっても決して過言ではない状態でした。どの被差別部落も文字通り惨憺たる状況におかれていたわけです。

僕は、大阪市内のある被差別部落に初めて入ったのです。大阪の被差別部落というのは大体、かなり規模の大き

い所が多いのですが、そこは大阪では比較的小さな部落でした。道路は狭くて路地のような道が入り組んで迷路のようでした。この花園大学の社会福祉学科に林信明助教授がおられますが、彼は僕の教室の1年先輩なのでして、一緒にずっと調査に歩き続けたものです。その部落の一番大きな建物であるお寺から出発して、ずっと一日の経路を決めて、聞き取りを主として歩き続けるのですが、比較的狭いムラ（部落）なのに、あまりにもゴミゴミし、ひっくり返りそうな住宅が密集しているものですから、なかなか元のお寺に戻れないのです。狭い所なのに迷子になってしまう。そんな状況の中で僕は初めて被差別部落のおかれている現状というものに驚天し、そして単純な意味での正義感「こんな状態が許されていいのか」という思いが起きてきました。これは人間としての当然の感情であったかと思うのです。

そう思い、ずっとそこで何日間かを過ごし、聞き取りをするなかで、今はもうすでに亡くなっていますが、当時70歳位だったおばあさんに出会います。僕はそのおばあさんの聞き書きをしている時に、またひどい衝撃を受けました。聞き取りのなかの最大の項目はやっぱり被

差別体験です。生まれて、物心がついて、現在に至るまでに、どのような差別を受け、そしてそれはどういう不利益をその人に与えてきたのかという被差別体験を聞き取ることです。これは大変、聞きにくいことですし、相手も言いにくいことです、やはり被差別部落での聞き取りで、それを聞かないわけにはいかない。ところが、この70歳近いおばあさんは、僕に対して「全然、差別されたことはあらへん」というのです。「いえ、そんなことはないでしょう」と、僕としては言わざるをえない。第一、先程も述べたように、環境面からしても、今のよう比較的整備された状況ではなく、一目で「あ、ここは部落だ」と判る状態が放置されており、それだけでもかなり深刻な差別の実態をみとめざるをえない。しかもこの方は、そのような差別的な状況の中で70年間を過ごしてこられた。現在からは考えられないもっとひどい差別の時代を生き抜いてこられたはずです。その人が「私は差別されたことが全くない」などということとはほとんどありえないことだと僕は思いました。いろいろ聞いてみて、ようやく合点がいったのです。つまり「私は差別されたことがない。なぜか」というと全く学校に行っ

ていない。それから、70年間、この部落からただの一步も外に出ないで過ごしてきた。だから、差別されなかった」というのです。

確かに学校というのは、被差別者が差別を体験する最初の間です。学校へ行って、クラスメイトや教師に差別されるとするのは、非常に屈辱的なものであり、涙を流さざるをえない体験ですが、実に、このおばあさんは、差別を受けるチャンスにさえ恵まれなかったのです。差別による徹底的な貧困、そしてその貧困のゆえにこのおばあさんは小さい時から、家の仕事を手伝い続けてきたのです。だから学校に行くチャンスがなかった（奪われた）、差別によって教育を受ける権利を剝奪されていたのです。本来、これ自体が強烈的な被差別体験であるのです。

さらにこの被差別部落から70年間、全然外に一步も出なかった。徹底的に社会性あるいは社会的交通権の範囲が限定されている。そのこと自体もまた同様に、大変な被差別体験だということができる。にもかかわらず、このおばあさんは少なくとも主観的には、それを差別としてはとらえていないということに、僕は大きなショック

クを受けたのです。

つまり大変な差別を受けながら、それを差別として対象化できていないという問題です。言葉を換えていえば、この人は（この人はというのはこの人だけがではなくて多くの被差別部落の人々の典型的存在といってもいいわけですが）いわば差別を差別ととらえる感性のレベル（知性も含めて）においてすでに犯され壊されているということです。僕はこの事実を知るに及んで、本当にびっくりしたのです。そういうレベルでも実は差別は存在したし、それは単に今から20年前の話ではなく、現実にもやっぱりずっと引き継がれて存在し続けているのです。

さらに感性・理性・知性のレベルで差別は、人間を破壊するだけでなく、より物理的・生物学的に人間の命さえ奪うに至る、非常に生き生きとした物質的エネルギーをもっているという事実も、僕はその後理解していきました。たとえば結婚差別事件の場合。結婚差別というのは、他の差別とももちろん同じ質をもっていますが、しかし結婚差別事件における絶望性というのは、一旦壊れた愛は二度と復元しないという点にあります。差別者が己の非を悟り、もう二度と再び差別はしまいと決心すると

ころまで糾弾や教育によって、もっていくことによしんば成功したとしても、すでに壊れてしまった愛は復元しない。この点は就職差別事件などの他の差別事件と違う絶望的な局面を生み出します。

なかには子どもの頃から、部落解放運動に参加し、そして自らの社会的な立場を自覚して生き生きと解放運動で闘っている方もいます。この人達はたとえ結婚差別を受けても、よもや死を選択する（自殺を選び取る）ことはないでしょうが、つまり徹して差別者と闘う姿勢を取り続けることが多いのですが、しかし部落解放運動を生き生きと闘わない、むしろ出身を隠して生き続けようとしている人々にとっては二度と立ち上がれないような衝撃となることが多いのです。もちろん、やはり差別者を徹底して糾弾し、教育しなければなりません。しかし、同時にその差別者は自分の犯した罪をどう償い生きていくのかを考えていく時、暗たんたる気持ちになるでしょう。差別は、被差別者にとってはもちろん、差別者にとっても悲劇です。

このように差別は人の命をも奪います。結婚差別事件だけでなく、その他の差別事件においてもやはり、差別

は人の命を奪います。

1974年にその存在が発覚した『部落地名総鑑』の事件は、皆さんもその名称ぐらいいは聞いたことがあると思うのですが。要するに主として企業が人間を採用する時に、その人間の社会的出身が何であるかによって採否を決めようとし、その資料として企業が利用できるように作りあげられた差別図書です。そこには全国の被差別部落の地名や所在地、あるいは職業構成などが詳しく書かれています。そしてこれを一冊数千円から最高5万円ぐらいいで企業が買うのです。売っているのは、主として興信所です。この『部落地名総鑑』購入企業は、今までにわかっただけで二百数社に及びます。購入企業に対する糾弾会に、僕は全部立ち合っただけではないが、かなりたくさんの糾弾闘争に参加しています。その全部が悪質ですが、そのなかで最も悪質だったのが銀行のケースでした。この企業の名誉回復のためにいっておきますが、糾弾を経てこの銀行は初めて部落問題をはじめとする人権問題に気づき、少しずつではあるが、企業体質の転換をはかりつつあります。

しかしこの企業は、これまでにわかっただけで、

少なくとも2人を部落出身だという理由で排除してきました。1人は大卒男子で、1人は高卒女子です。高卒の女子生徒は、別の企業に就職し、もう今は結婚し子どもが1人生まれて、普通の生活をしているそうです。もう1人の男子の方は、京都大学の法学部を卒業した学生です。彼は部落解放運動に全然参加しないで、出身を隠して、とにかく一生懸命に勉強して大学に入り、そして一流といわれている企業に就職さえできれば、部落差別から逃れると思ひ定め、そのような生活をしてきた。島崎藤村の描く『破戒』に出てくる「出身を隠せ」という教えを守り続け、被差別部落から逃亡を図るという生き方を選択してきた学生でした。そのような生き方はそれなりに成功を納め、そして京都大学の法学部に入ったところまでは成功だったが、卒業に際してこの差別性の強い銀行を選択してしまったのです。そして、徹底した差別的な選考マニュアルにひっかかって、出身があばかれてしまったわけです。彼にしてみれば、とにかく子どもの時から勉強ばかりやってきた、その事によって、差別から逃れられるはずだと思ひ定めてきたにもかかわらず、やっぱり就職という人生の最大の節目ふしめにおいて、出身が問

題にされてしまった。この調子でいけば、他のどの企業を受けても同じように部落出身だということで拒絶されるのではないかと、大変絶望し、京都大学の横の吉田山で首をくくって自殺してしまっただけです。もちろん、その学生が、その企業に排除されたことだけで自殺したのかといわれると、それは断言できません。が、しかし時期的な符合とか、状況的意味とかで、まず間違いはないはずです。

そういうふうに、結婚差別にしても就職差別にしても、やはり部落差別は現実に人間の命をさえ（感性や理性だけでなく、本当に生命それ自体を）奪ってしまう生き生きとしたエネルギーをいまだにもち続けています。このことをまずは皆さんも、はっきりと認識すべきだと思います。

すべてのエピソードにはさまざまに深刻な問題をはらんでいるのですが、あれこれの差別の現象を述べても、きりがありません。そこであれこれの差別の現象を現象として生み出しているもの、つまり差別の本質は何であるのかについて、次に述べたいと思います。しかし差別に対する定義は、人によって多様です。最低限一致でき

きる定義として、僕は「差別は民衆を分断する（バラバラにする）楔^{くさび}である」と言いたいと思います。本来ならば、お互いに手をつなぎ、結合し、連帯し、共通の利益を追求すべき人々が、そうならないように打ち込まれた分断の楔、それが、まさに差別の本質ではないかと思うのです。

もう一昨年のできごとになりますが、横浜・寿町のいわゆる日雇い労働者が、中学生たちに連続的に襲撃され、ついに3人の労働者が撲殺される（殴り殺される）事件がありました。加害者の中学生は、あなたたちのいわば同世代に属するので、よく記憶に残っていると思います。その後も、横浜の寿町だけでなく、東京の山谷、大阪の釜ヶ崎でも類似の事件が続発しています。

この横浜寿町の事件の後、僕はすぐに横浜に行きました。そして現場をずっと回りました。3人の労働者が殺された現場は3つあり、全部バラバラです。横浜に行く前の僕の想像では、現場は非常に薄暗い所で、中学生が労働者を襲撃しているのを誰も見る事のない（見えない）所だと思っていました。しかし、行ってみると、さにあらず、現場は非常に明るい所で、事件はたくさん

人々に目撃されていたのです。けれども誰一人として止めに入った人はいません。それどころか、警察にも連絡していない。電話もせずに、ただ放置していたのです。一体これはどういうことか。

後に、労働者を殺害した中学生たちは、補導した警察官に対して「奴ら（労働者）はゴミである。町を汚しているゴミを掃除して何が悪いのか」と述べています。彼らにとって、この労働者たちは“ゴミ”でしかなく、そういう人間観をしか養ってはこなかったのです。

この労働者たちというのは、長びいている不況の中で仕事がない。仕事がないので、通称「ドヤ」といわれる簡易宿泊所に泊まるお金もなくて、やむをえず俗にいうアオカン（野宿）をせざるをえないのです。そして野宿しているところを、襲われて叩き殺されているのです。

そういう状況におかれている人々が、この中学生たちにとっては“ゴミ”としか映らなかった。ゴミを掃除するつもりで殺したという中学生たちは、では彼らが所属する中学校の中で、どのように見なされてきたのか。その学校へも参りました。そしてその子どもたちが他のクラスメイトたちに、どのように評価されているのかを聞

きました。すると「奴らはうちの学校のゴミだ」というのです。つまり徹底的な落ちこぼれ（落ちこぼされてそうなったのですが）であるのです。何のことはない、この中学生たちも現代における支配的な教育思想（皆さんもある意味では、その被害者ですが）、差別選別主義的な能力主義の今日の支配的な教育イデオロギーからすれば、徹底的な被害者として位置づけられている存在です。

一方、殺された労働者たちは、現在の主要な労働市場からはもちろん、付随的な労働市場からさえも、全面的に排除されている被害者なのです。立場は若干違いこそすれ、根本的に現代社会の被害者という点では、全く共通しています。したがって本来ならば、この中学生たちが、あの労働者たちを襲撃し、あまつさえ殺害するなどという根拠は全くなかったはずなのです。

逆に、対立するどころではなく、同じ被害者の立場に立つ者として、手をつなぎ自らをそのような立場に追い込んでいる（目に見えるかどうかわからないが絶対に存在するに違いない）共通の真の敵に対して、異議を申し立て抗議行動に立ち上がるべき共通の客観的立場に立っていた人々のはずです。にもかかわらずいわゆる“浮浪

者”（ナチスが“浮浪者狩り”をして以来、浮浪者という言葉は職のない日雇い労働者に対する差別語・差別表現になっています）という言葉に示される差別意識、あるいは社会意識として成立している差別意識が介在した途端に、本来存在するはずの共通の利益、あるいは本来の連帯すべき必然性というものが、どこかに一ぺんに吹っ飛んでしまうというわけです。そして襲撃という絶望的な関係に立ち至ってしまった。まさしく本来ならば、手をつなぐべき人々がそうならずバラバラになるよう打ち込まれた分断の楔として差別があるのです。これは何も横浜寿町の事件に該当するだけではなく、すべての差別事件に適用可能な一つの重要なテーゼ（命題）だといえます。

何よりも皆さんにこれから考えていってほしいことは、その点なのです。部落出身者に対する差別がなぜあるか、在日韓国・朝鮮人に対する差別がなぜあるのか、障害をもつ人々に対する差別がなぜあるのか、女性に対する差別がなぜあるのか、カラー（黒人やあるいは黄色）に対する差別がなぜあるのか――。それらのことを考えていく際に、今述べた点がただ一つの基準点になるとはいえ

ないまでも、かなり重要な視点になると考えます。本来手をつながねばならない人々がバラバラに分断させられ、それを合理化するものとして差別があるという視点で、人間関係のありようを考え直してもらいたいと思います。そうすると、差別していい気になっている自分とは、一体何者であるかということが、多少とも鮮明になってくるはずだと思っからです。

そのように差別を民衆分断の楔だととらえたとして、では、それはどこから生まれてくるのか。それはいうまでもなく、現在の社会関係の総体（全体）だと思っます。僕らが学生生活を送っていた頃というのは、マルクス主義が全盛期とはいえないまでも、相当の影響力をもっていました。僕が入学した大阪市立大学は、当時ある程度左翼的な大学で、それが魅力で入学した学生がずいぶんいました。当然のことに全体的な雰囲気として、一・二回生の教養部にいる間に、わからなくてもいいから、とにかくマルクス主義の基礎的な文献を全部、ちゃんと読んでおく、そうしないと、とてもじゃないが恥かしくていられないという雰囲気が、濃厚にあったのです。今は逆でして、そんなものを読んでいるのは恥かしくて大学

にいられないような雰囲気になってきています。

僕は先程も述べたように、一回生から二回生になる間に、初めて被差別部落の問題に接触します。そして一方では、マルクス主義の学習を進めていました。マルクス主義はそれなりに（それなりにというとマルクス主義者に失礼ですが）有効性をもっています。僕もマルクス主義理論で部落問題を割り切っていくことができたのです。ただし、当のマルクスは差別について何もいっていない。もちろん、彼の主要な概念は経済学的には「搾取」であり、政治的には「抑圧」であります。差別というのはそれら「搾取」と「抑圧」の一種の反映であると考えられます。

ただ基礎的な文献の中で、皆さんに読んでもらいたいのはマルクスの『賃労働と資本』という本です。題名は硬いのですが、割合読みやすい本です。その中に差別にかかわる部分が（差別という言葉は使っていませんが）わずかながらあります。

なぜ僕がその部分に魅かれたかということ、一回生から二回生になる頃に被差別部落に初めて接触し、その後ずっと接触し続けるわけですが、「こんなにひどい差別が、

そう簡単になくなるのだろうか」と非常に、一種絶望的な感じがあったことと無関係ではありません。「なくさなければならぬ、こんな状態が許されていいはずはない」という思いが一方にありながら、「果たしてそれは、たとえば自分が生きているこれから50年ぐらいの間になくなるのだろうか。あるいは百年というタイム・スパンでなくなるかどうか」と考えた時に、「あゝ、ちょっと無理ではないか」という感じをさえもたされたのです。ところがこの『賃労働と資本』を読んでいるなかで、次のようなくだりにぶつかったのです。おそらくこれは、マルクスが彼の膨大な著作のなかで触れている、差別にかかわって書いた部分のいくつかのうちのひとつだと思います。そこにこう書いています、「黒人は黒人である。一定の社会関係によって彼は奴隷となる」と。つまり黒人というのは、単に色が黒い人間である。白人は単に色の白い人間なのだ。人間的価値においては、何ら差がない。にもかかわらず一定の社会関係を媒介させた時に、黒人は白人の奴隷にさせられてしまうということなのです。

たとえば黒人に対する差別をアメリカでみた場合には、

先程のリンカーンじゃありませんが、黒人が白人の奴隷という形に置かれてしまう。白人と黒人の人間関係は、奴隷になるか、あるいは奴隷を所有するかという関係に置き換えられていく。もし黒人がただ色の黒い人間のままとどまる（白人が色の白い人間としてとどまるのと同様の状況に、置かれているだけ）ならば、そこには差別は存在しないのです。正しく単なる差異（違い・ディファレンス）でしかない。それがあある一定の社会関係を通して奴隷にさせられてしまった時に、差別（ディスクリミネーション）に変わる。ここが肝心要^{かなめ}のところ。だからこの一定の社会関係のありようの内実を変えれば、差異は差別に転化しないということになります。ですから、差別撤廃のためには、差異を差別に転化しない社会関係を作り上げる（構想する）ことが必要になるわけです。この点は他の差別についても同様です。

マルクスのこの記述から、僕なりに解放の展望（問題解決の展望）をとらえることができたと思います。それが全部だとはいえませんが、ある程度確信をもつことができたのです。つまり社会関係を変える、差異を差別に転化する社会関係の変革こそが反差別の営為ということ

になります。たとえば黒人解放は、決して黒人の色が白くなって白人になるとか、白人に近づくことではないのです。確かに昔、少くとも1960年代初めぐらいまでは、かなりそういう黒人がいました。「すべての差別の根源はこの皮膚の色にあるので、何とか白くなりたい」と軽石で顔をゴシゴシ擦り、血がだらだら流れてもやめようとしない。白くなりたい一念で、面相が変わるまで擦り続ける。しかしこれは変わらない（白くならない）。そこで大変絶望させられていくという、非常に悲劇的な事実もあったのです。

しかしこれは違います。黒人の色が白くなることが黒人解放ではない。同様に女性解放だって、（当り前のことですが）女が男になることはできない。障害者解放の展望も、そうです。障害者が障害をなくして、健常者（健全者）のモデルに近づくことが障害者解放だとはいえない。もちろん訓練や教育を経て障害を克服するということまで否定しないけれども、しかしながら障害が重度になる程、いくら教育を受け訓練されたところで、健常者のモデルに近づけない。ではその場合どうするのか。

「それは悪い障害者だ」といって隔離してしまっすま

せるのか。そして健常者モデルに近づける軽度の人たちだけが、差別を克服する権利をもつことになるのか。こうした考え方は、やはり根底から誤っていると思います。

そうではなくて、黒人が黒人のまま人間として丸ごと解放されることが真の解放であるように、女性が女性のまま人間として丸ごと解放されるのが解放の展望であるように、障害者が障害をもったままで丸ごと人間として解放されるのが解放の展望だと思うのです。被差別部落の問題についても、部落出身者が部落民をやめることによって、部落問題（差別）を克服できるのではない。部落民が部落民としてのアイデンティティを固めつつ自らを人間として解放していく社会関係を作り上げることが、まさに解放の展望だと思うのです。

もちろん皆さんのなかには、異論のある人もおられるかと思いますが、が僕は、そういうものこそがまさに解放であり、解放の展望だと思うのです。だからこそ1960年代後半、アメリカにおいて「ブラック・イズ・ビューティフル（黒は美しい）」というスローガンが生み出されたのです。今までは「白が美しい、何とか白に近づきたい」と努力してきた。この努力が決して差別からの解

放を保障するものではなく、むしろ差別を強化する以外のものではないことに気づいたのです。「ブラック・イズ・ビューティフル」といったのは、決して黒人の居直りや開き直りではありません。自分が自分であることに絶対の確信をもつこと、障害をもつ人が「障害をもっていて何が悪いのか。人間として何の差があるのか」といい切れるところまできて、初めて差別に異議を申し立てることができ、自らを解放の主体として作り上げることができるのではないかと思うのです。

そう考えていった時、部落差別に限らず他の差別についても、それらの差別の存在が、そのことによって当面直接に被害を受ける人たちだけの問題ではないということが、かなり鮮明になってくるのではないか。なるほどたとえば障害者差別によって直接被害を受けるのは障害をもっている人々です。あるいは部落差別によって直接被害を受けるのは、すでに述べた結婚差別事件や就職差別事件で明らかのように、部落出身者がまず第一義的な被害者になることは、間違いない。黒人差別においても在日韓国・朝鮮人差別においても同様です。しかし、問題はそれだけではないのです。つまり、差別を許してお

くことによって被害を受ける者（不利益を被る者）は、確かにその被害を直接受ける社会的被差別者と見なされている人々です。しかし同時に、障害をもたない（健常者）、部落出身者ではない人、在日韓国・朝鮮人ではない人にとっても、差別は強烈に不利益をもたらすということを考えてもらいたいのです。それはなぜかということ、先程も述べたように、差別は本来的には手をつなぎ連帯しなければならない者の間に打ち込まれた、分断の楔であるからです。分断されているということは、民衆にとっては全く不利益以外の何物でもないのです。そのことをやっぱりきちんととらえてほしいと思います。

20年前に出た『同対審答申』は「部落問題の解決は、国の責任であり、同時に国民的課題である」とうたったのです。京都市の公共建造物や、地下鉄や市バスに乗っても標語を書いたポスターをよく見かけます。「同和問題の解決は、市民ひとりひとりの課題です」とあります。この「国民的課題」とか「市民ひとりひとりの課題」というのは、僕は結論的には「全くその通りだ」と思うが、では一体なぜそうなのかということは、今まで一度も明らかにされていません。

「部落問題の解決は、部落出身者の課題です」というのは当たり前ですし、「障害者差別の解決は、障害者の課題です」というのも当たり前です。差別が存在することによって、誰よりもまず被害を受けるのはその人たちですから。だから部落差別に対して部落出身者が反対するのは当たり前です。それならば、「市民ひとりひとりの課題」であるのは一体なぜなのか。差別を許すことで、自分は差別する側だといいい気になっている者までもが、その差別によって実は被害を受けているんだということをきちんと理解しなければならぬ。そうでなければ、いつまでたっても人権の問題、差別の問題は他人事なのです。「私はそれによって全然被害を受けない。かわいそうにあの人たちは自分たちだけ被害を受けて」ですんでしまっただけは、少しも問題の解決につながりません。

少し具体的な事例をあげて説明します。大阪のある中小企業で、実際に起きた事件（問題）を手短かに紹介します。それは15人ぐらいの零細企業です。そこではずっと労働組合がなく、社員（労働者）たちは親方（社長）の前でイイカッコばかりして、他人が5時間残業したら自分は6時間するとか、他人が昼食に一時間休憩を取っ

たら自分は10分しか休まないで後は全部働くとかして、少しでも給料をたくさん貰いたい（高く評価してほしい）と頑張っていました。まさに労働者意識のかけらもない姿です。

そこにある労働組合のオルグが入り、めでたく労働組合ができるのです。そしてオルグに入った労働運動の指導者は、びっくりします。同業他社に比べて非常に労働条件が悪いし、賃金も低いからです。それにもかかわらずまだ労働者たちは、お互いの足を引っ張り合って「もっと賃金を安くしてもかまいません」とか、「もっと長く働きたい」といっているのです。オルグたちはこれにあきれ果て、そしてそれなりの労働教育を施して、労働組合を結成することになる。

そのオルグの過程で労働者たちもさすがに、いかに自分たちが同業他社に比べて賃金が安く、労働時間が長いかを思い知らされます。それで第一回の労働団体交渉に入るわけです。とりあえずベースアップを要求します。ところが社長はこれを一蹴します。社長のいい方がふるっている、「なるほどうちの企業は、どこの企業よりも賃金は低い。そのことは認める。しかしこの安い賃金に

不満な人は、明日から来てくれなくて結構だ。幸いうちの企業は熟練労働も必要としないし、実は労働者は誰でも構わないのだ。安い安いといっているあなたたちの賃金の半分でも、喜んで働きたがっている人間は、この世の中にゴマンという。自分は明日からその人たちを雇うから、君たちは明日から辞めてくれても何の痛痒つよようもない」と。

そういう社長のデタラメな発言の前に、このできたての労働組合は全面的に敗北してしまいます。なぜかという、まさしくここには差別の論理が機能したからです。この社長のいう「あなたたちの安い賃金の半分でも喜んで働きたいと思っている、ゴマンという（たくさんいる）人間」とは、一体誰を意味しているのか。それは先程述べた、横浜寿町あるいは東京山谷、大阪釜ヶ崎で常に“あぶれ”の心配のなかにいる労働者たちであり、あるいは全国的にみて15～18%ぐらいの失業率のなかにもまだ漂っている被差別部落の人々などを意味しているにちがいません。「こういう人々だったら相当安い賃金でも尻尾を振って喜んで働きに来るんだ」という差別的な思いが、社長のなかにあるのです。このような社長の

発言に労働者たちは敗れてしまった。その原因は労働者たちもまた差別的であったからです。「なるほど社長が言うのも、もっともだ。我々はものすごく賃金が安いと思っていたが、なかには俺らよりもっとひどいのがいる。それに比べれば、まあいい方ではないか」という発想がひとつあります。もうひとつは「我々の安い賃金の半分でも喜んで働きたいなどという、けしからん連中がいるから、自分たちの要求が全然通らないのだ」というものです。どちらにしても、いわゆる社会的に被差別者とされている人々に対する、連帯や共感の意志・意識が、これらの労働者のなかにあるとは言えません。むしろ逆に社会的被差別者に対する違和感や嫌悪をかき立て、自分が今おかれている最も不合理な状況を合理化し、自らの葛藤を解決するということに結着してしまいました。

この社長は、うまく社会的差別を利用して、労働者の要求を抑え込むのに成功したのです。差別というのは、そういう形で利用されるのです。だからこそ“差別は民衆を分断する楔である”といい切れるのだと思います。

社会的差別を認めることが、当面社会的な被差別者の立場にはない人にとっても、非常に大きな不利益をもた

らすものだと気づくことができ初めて「同和問題の解決は、市民ひとりひとりの課題です」とか「部落問題の解決は、国民的課題です」ということができるだろうと思います。とりあえず僕は、差別と人権の問題を考える際に最も基礎的な、少なくともその観点を取り除いては問題の本質をとらえられない点のみに限って、述べたのです。

最後に、やはり皆さんが大学に在席している（これから最低4年間は、在席しているのですが）意味と、今まで述べてきたことの関係について考えていきたいと思えます。

僕は自分の経験として、リンカーンの差別性を初めてわかったのは大学に入ってからだったというお粗末さを告白しましたが、同じような意味で、何よりもまず現代の世界の抱えているもろもろの矛盾を見抜きうる力を身につけていただきたい。そしてただ見抜いて「ああ、矛盾に満ちておるわい」で済ませるのではなくて、見抜けばその変革を目指す自立的な主体性を、何としても身に付けてもらいたいと思えます。そういう自立性・主体性が確立されて初めて、人間のありようの全体が、ある程度

展望できる地平に立つことができるのではないかと思うのです。

僕が所属している毎日新聞でも、あるいは朝日新聞でも、しょっちゅう世論調査をするのですが、それを見るとここ数年、青年層（若い世代）の保守化・右傾化が、非常に極立ってきています。

僕は去年、大阪市立大学で講義をした時に、これが我が後輩かと、あきれ返ったのですが、マルクス、エンゲルスというのを一人の人物だと思っている学生がいました。姓はエンゲルス名はマルクスだと。しかし、あきればかりもいられないのです。僕としてはやがて気を取り直して授業を続けましたが、そういう時代に今や入ってきています。大体20代というのは、30代、40代（僕は今40になったばかりですが）よりもっと保守的で、世論調査の結果を見ても、非常に高率に若い世代ほど、今の政治に満足し、今の生活に満足している、と答えています。徹底的な保守志向が表面化してきています。現状を肯定しているのです。現状を肯定するというのは何か。つまり現在の自分の生活に満足することですから、自分が今、ぶち当たっていると思う（思わないでしょうね）

矛盾は、客観的にあるにもかかわらず、それを矛盾としてもとらえることができない(とらえようとしない)のです。自分が当面している矛盾に気がつかないのは、まさしく知的荒廃です。そこからは何も生み出されるものがないと思います。「世の中は、こんなものだ」などと若者が発言すると「そんな年寄りくさいことをいうな」といったものです。今はアベコベで、保守的なことをいえば「そんな若者みたいなこというな」と、何のことかわからないようになってきているのです。

しかも憲法改「正」という問題(私からいえば改悪ですが)についても、3, 40代以降は「現行憲法を守る」と答える人がなお多数派ですが、20代は「変えよう」という人が少なくない。なかんづく「九条, 一条を変えよう」と。保守というのは、現状を守ろうというものです。憲法に関しては「変えてしまおう。戦争放棄なんてやめてしまおう」というのです。これは単なる保守ではない。全く反動化であり、右傾化だといわざるをえません。結局単なる現状維持だけではなく、現状維持という形でカムフラージュした逆流の問題が浮かび上がってきていると思います。

僕は、これまで差別についていろいろと語ってきました。差別がどんなにひどいものか、差別が人間の命を奪うエネルギーをさえもっているために、自分も差別とたたかわないかぎり、いつ殺人者になるかもしれないと思われたと思います。そして殺人者になるかもしれない自分が、実はその差別によって、同様の被害を受けるかもしれないというところまで、思い及んでもらっています。が、もう明日ぐらいには忘れてしまうということもありえないことではないと思います。

なぜならば、社会の状況が総体として、そうなっているからです。そういう非人間的な差別という、人権侵害の最たるものさえもが、大変とらえにくくなる。たとえ見えてきても「あゝ俺とは関係のないことだ」と逃亡をはかろうとするかもしれない。しかし、僕はみなさんに、やはり差別の問題を真正面から考え尽していったほしいと思うのです。

人呼んで現代の若者を「アイデンティティ拡散症候群」といいます。アイデンティティというのは非常に日本語にしにくい言葉です。自分以外の何者でもないという確固とした意志・自己意識とでもいいますか、「そんな事

は当たり前だ。俺は俺に決まっている。俺は俺以外の何者でもないよ」と思うでしょうが、本当にそういい切れるか。名前さえ変えたら、誰でも通用する自分でしかないということに思い到って、ゾッとすることはありませんか。他の誰でもなく、俺は俺だといいい切れる何ものかを私たちはもっているのでしょうか。そういう確固とした自己意識、つまりアイデンティティが非常にバラバラに拡散している。自分は一体何者か。一体どこへ行こうとしているのか。何がしたいのか。どうしようとするのか。そういう発想さえも弱くなってきているのではないか。

去年、“浅田彰現象”というのが起きました。京都大学人文科学研究所の若手の経済学者、浅田彰という人が、『構造と力』とか『逃走論』とか、非常に難解な哲学の本を書いたところ、たとえば『構造と力』などは10万部近くも売れてしまったのです。浅田彰さんの本がものすごく売れたので“浅田彰シンドローム”と呼ぶのですが、なぜ流行したのだろうか。もちろんいろいろな理由がありますが、僕はあの本を読んで非常に不愉快でした。どこが不愉快かというと、要するに、一つの事物に長く思いをとどめて自分の理想の達成に執着し続ける人間の

タイプを、“パラノ人間”と名づけ、非常にダサイ人間として象徴したのです。逆に、今はやりの軽薄短小にあれこれ変身を図り、軽やかにその時その時を面白おかしく、楽しく生きることには価値を見出す人間を“スキゾ人間”として非常に高く評価したのでバカ受けしたのです（主として若者に）。ネクラに対するネアカの完全勝利といえると思います。

やはり僕としては、皆さんに真剣に人間のことだとか、社会のことを考え続けていく人間になってもらいたいと思うのです。そしてさまざまな人々と真面目で誠実な人間関係を作り上げ、保っていくようにしてほしいのです。

現代の青年は豊かな人間関係を結ぶのが非常にへたです。学生に聞いてみて面白いことに気づいたのですが、「親友の名前を挙げて下さい」というと、大体3人止まりです。「では親友でなくていいから、友達といってよいと思う人も追加して下さい」といっても、それ以上いかない。大体3～4人が限度です。これは一体なんだろうか。つまり社会性が極めて縮んでしまっているということなのでしょうが、3、4人というのはいってみれば一台の車に納まる人数です。そういう小集団における徹

底的濃密な人間関係と、それ以外の外部社会に対するあ
っけらかんとした無関心が、重なりあっているように思
うのです。

ある大学のゼミの先生に聞いた話ですが、(これは私
立の大学なので、ゼミといっても人数は2, 30人程度)、
そのゼミは少なくとも二年間、毎週一回は同じ所に集まる
にもかかわらず、二年経って卒業の段階になっても、そ
のゼミのメンバーの半数と口をきいたことがない学生が
いたのです。ゼミ旅行に行き、コンパで酒を飲んでいて
も、誰も何もいわないのでいっこうにコンパが始まらな
い。先生は自己紹介して自分でお酌して回るのだそうで
す。

みんながそうだとはいいませんが(これは一つの面白
おかしい現象にしかすぎません)しかし、時代の状況は
徐々にそうってきているのではないか。豊かな人間関
係を作るのが苦手な人々からは、豊かな思想やものの考
え方が、生み出されるはずもないのです。人間は日常に
おいて、いかなる人間と関係を切り結んでいるか、もし
くは切り結びたいと思っているかで、その人の思想の構
造は決まると僕は考えています。

確かに、本を読んで新しい思想を自分の頭に、インプリントもしくはインプランテーション（移植）することはできます。しかしそんなのは思想の名に値しない。むしろその人間が日常切り結んでいる人間関係の中で培われていくものの考え方、感じ方、態度などが、その人間の思想の根幹を作るだろうと思うのです。

花園大学には、部落出身学生、障害をもつ学生、在日韓国・朝鮮人学生が少なからず在席しています。とりあえずまず、そういった学友との積極的なかかわりを育て上げて行ってほしいのです。そこから初めて、他人に対する想像力や、言葉の真の意味での理解と共感を育て上げることができるし、それがすべての学問（これからの勉強）の基本になるのではないかと僕は考えます。

先程西村恵信先生がいわれたように、花園大学でも差別事件が続発しています。それに現代日本社会が差別社会であるがゆえに、その差別社会の上に成り立っている大学それ自体が、やはり差別構造から免れず自由ではないからです。そのことの反映なのです。ですから「花園大学で差別事件が起きるのは当然だ、仕方がない」ではいけない。大学は真理を追求する場所なのです。そこで

差別が起きるということをもっと絶望的な問題としてとらえ、変革していくことが、必要ではないかと思いません。

もう少し話したいことを準備してはきたのですが、時間がなくなりましたので、もうやめます。

僕は社会学を専攻したのですが、どうしても社会的な発想が中心になるのですが、歴史学とか宗教・民族学その他もろもろ（心理学、社会心理学、経済学、政治学、法学）も差別問題を考える上で必要です。それらのさまざまな領域が、部落問題という一つの差別の問題、人権侵害の社会的現実と深くつながっているのです。

だから部落問題は、部落出身者とか部落問題の研究者とかが考えればよいというものでは毛頭ないのです。もっと学際的な攻め方が、部落問題（すべての差別や人権侵害）に必要だと思います。

皆さんは、さまざまな学科に入学されています。専門はこれから異なりますが、異なっても、どの分野からみても部落問題を中心とするあらゆる差別の問題は、無縁ではありえないのです。さまざまなところからこの問題に切り込んでいく、自分の問題として切り込んでい

くことができます。また必要なのです。

そういう作業(この大学なら教員、教職員と学生が一体となってさまざまな領域から、部落問題を中心とする差別の問題に切り込んでいくこと)が、おそらく日本の文化構造、あるいは社会・政治・経済構造を明らかにするひとつの道筋を切り拓くことになるだろう。

これまで、部落問題を全く欠落させた形で、日本の学問は形成されてきました。そういう意味で、日本の学問は差別学問であったし、学問を生み出してきた大学も、差別者の立場にしかなかったのです。それはここ数年、多少とも変化が生み出されてきました。そのことをもっと深めていくことが、今客観的に要請されていると考えます。

そしてすでに述べたように、差別の本質である「分断」の状況を変革する、真の言葉の意味での連帯、つまり本当の意味での人間的結合を全体として、もう一度組み立て直すという学問が求められていると思うし、そういう観点から是非ともこれからの4年間ないしそれ以上の学生生活を送って欲しいと考えます。またそういう観点から自分の生活を組み立て直していくような考えに立って

いただきたいと思います。

まだまだ思いが余って、しゃべりたいことがあるのですが、時間が丁度なくなりましたので、今日の話は、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございます。

(1986年4月11日 新入生 オリエンテーション講演より)